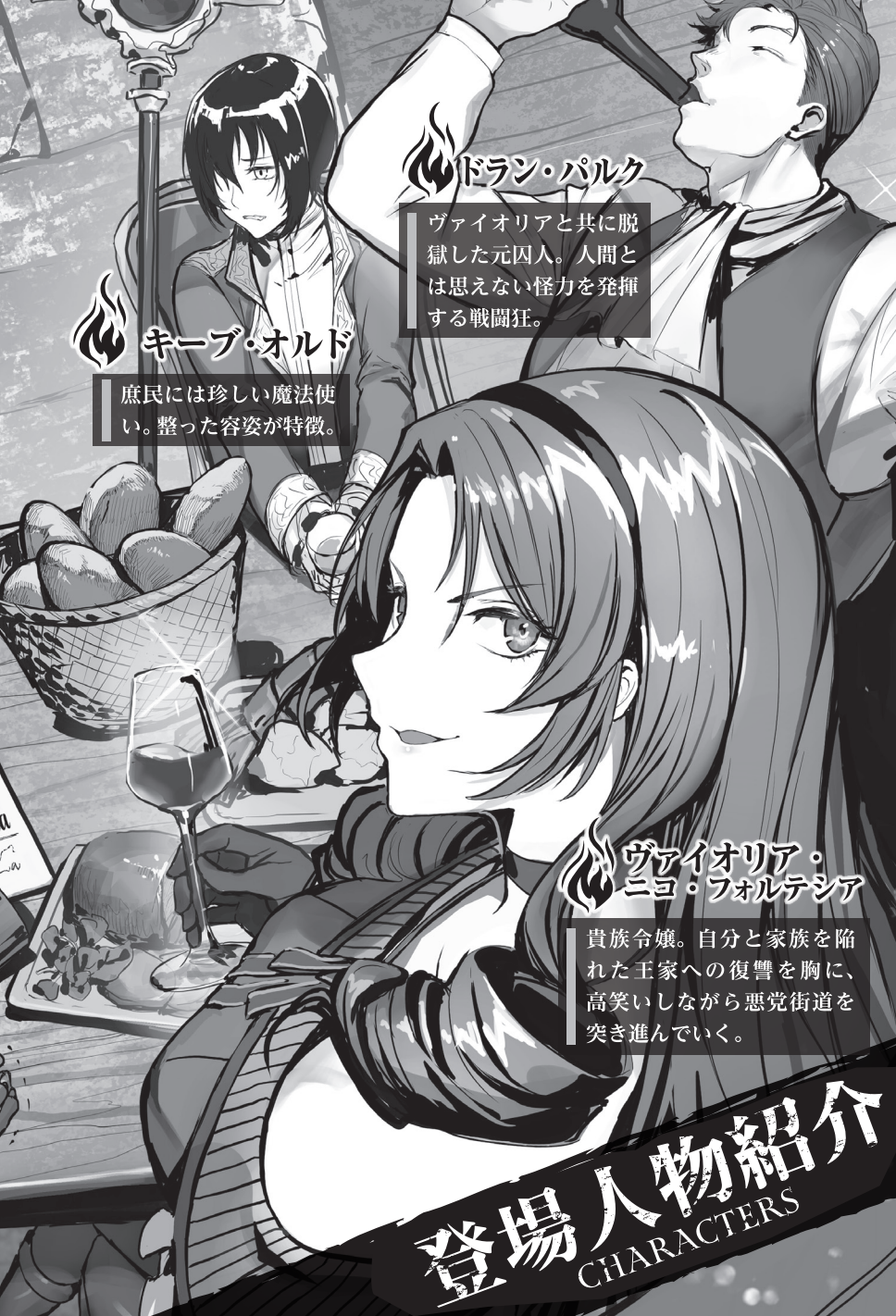
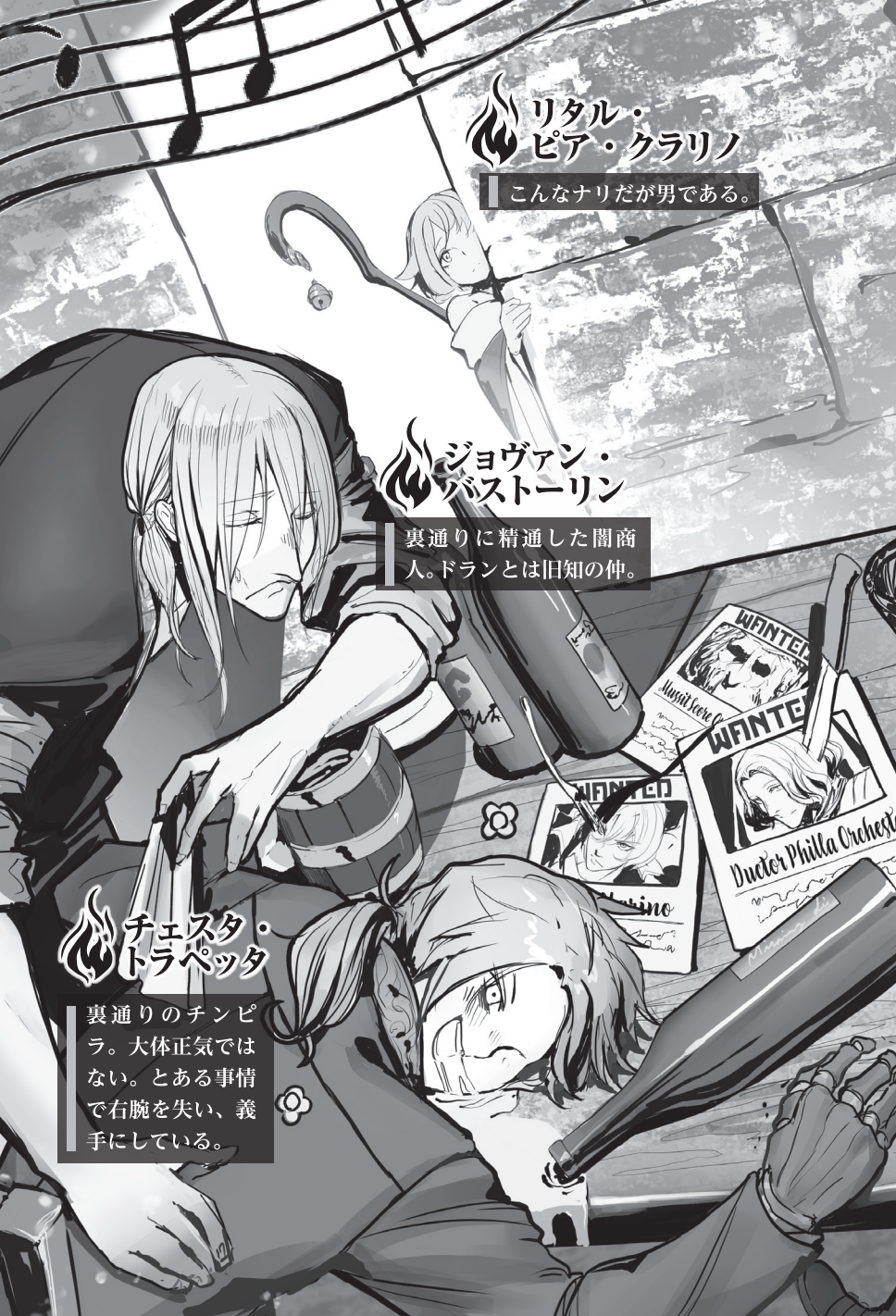
没落令嬢の悪党賛歌

上


ドラン・パルク
ヴァイオリアと共に脱獄した元囚人。人間とは思えない怪力を発揮する戦闘狂。
キーブ・オルド
庶民には珍しい魔法使い。整った容姿が特徴。
ヴァイオリア・ニコ・フォルテシア
貴族令嬢。自分と家族を陥れた王家への復讐を胸に、高笑いしながら悪党街道を突き進んでいく。
登場人物紹介
CHARACTERS



リタル・ピア・クラリノ

こんなナリだが男である。

ジョヴァン・バストーリン

裏通りに精通した闇商人。ドランとは旧知の仲。

チェスタ・トラペッタ

裏通りのチンピラ。大体正気ではない。とある事情で右腕を失い、義手にしている。

没落令嬢の悪党賛歌 上

目次

プロローグ　006

一話　あいつら全員皆殺しですわ　009

二話　シャバに出ますわよ！　024

三話　狩りは貴族の嗜みですわ　043

四話　ごきげんよう裏の世界　061

五話　これが一番儲かりますのよ　077

六話　裏市場は私が独占しますわ　111

七話　畑が無いなら村を焼けばよくってよ　141

八話　海も私のものですわ　168

幕間　バカンスですわっ！　209

九話　人攫いし放題ですわ！　222

十話　舞踏会、燃やしますわ！　243

エピローグ　268

番外編　カジノは私の養分ですわ　273

巻末資料　311

プロローグ

海沿いの白い街並みを、淑女が一人歩く。大きな鞄を手に、濃い栗色の長い髪を潮風に靡かせ、慎ましやかなドレスの裾を翻し、気品と力強さを感じさせる足取りで。

はっきりとした意思を宿した瞳は、赤。その色はまるで、ザクロかルビーか、はたまた血か炎か。美しく、ともすれば不気味にも見えるその瞳が、ふと空を眺めた。夏に相応(ふさわ)しい快晴の空を、みゃう、と鳴いてカモメが通り過ぎる。淑女は白い翼と日差しの眩しさに目を細めると、微笑(ほほえ)んでまた歩き出した。

そうして彼女が向かった先は、港町エルゼマリンの裏通り。表通りの白く整った街並みから一転、薄暗く薄汚れた街並みがそこにある。

煤けた漆喰は罅割れ、剥がれ落ち、その下のレンガ壁を覗かせている。道の脇には怪しげな露店が並び、明らかに真っ当ではない人間達がちらほらと行き交い、剣呑な小競り合いも珍しくない。

そんな街並みの中、高貴な生まれを感じさせる淑女の姿は、異質であった。だが、彼女はまるで臆することなく、実に慣れた様子で——実際によく慣れているのだが——裏通りを進んでいった。

やがて一軒の店の前へ辿り着いた淑女は、躊躇なくその店の扉を開く。

「ごきげんよう！　買い取りをお願いしたいのだけれど」

入って正面は、カウンター。それも、互いの顔が見えないよう、木の板で間仕切りがしてあるも

のである。裏通りの店では、後ろ暗い品もやり取りするため、こうしたカウンターが少なくない。
淑女は鞄を開け、毛皮や牙を取り出し、カウンターへ並べる。すると、間仕切り板の下から骨ばって大きい、骸骨めいた不気味な手が伸びて毛皮と牙を持っていった。よく見慣れた、ここの店主の手だ。淑女は店主の名も顔も知らないが、声と手だけは知っている。彼女はここの常連なのだ。
「毛皮に傷はナシ、と。相変わらずいい腕してるね、お嬢さん。惚れ惚れしちゃう」
掠れた声が低く笑って、淑女を褒め称える。いつものことだ。
「じゃあ、買取額はこんなところで」
そしてカウンターの奥から、じゃらり、と重い音を立てる革袋が差し出された。いつも通り、中には金貨がたっぷりと詰まっているのだろう。……だが、淑女はそれを手に取らない。
「ああ、それ、そのままあなたに預けますわ。それで、空間鞄を注文したいの。足りるかしら？」
「はいはい。そういうことなら、この額に見合うやつをいくらか見繕っておきますよ。前払いして頂ける分、品質にはこだわっておくからね。期待していいぜ、お嬢さん」
「ありがとう。夏が終わる頃に取りに参りますわね」
手短にやり取りを終えると、淑女は店を出て、また裏通りを歩いていく。
やがて表通りへと戻ってきた淑女は、そこに停めてあった馬車に乗り込んだ。馬車には家紋が刻まれている。それは新興貴族、フォルテシア家のもの。
そう。颯爽と裏通りを歩き、臆することなく裏の店に入り、自ら狩った魔物の毛皮を売り捌いた淑女の名前は、ヴァイオリア・ニコ・フォルテシア。

歴史書に名を刻まれることとなる女傑である。

一話　あいつら全員皆殺しですわ

ごきげんよう！　私、ヴァイオリア・ニコ・フォルテシアと申しますわ。
自己紹介するならば、成金貴族と巷で有名なフォルテシア家の娘、と言えばいいかしら。
勿論、成金といえども貴族は貴族。それなりの能力と品格は兼ね備えているつもりでしてよ。家門の古さの上に胡坐（あぐら）をかいている上流貴族なんかに負けないよう、日々、精進しておりますの。その甲斐あって、私、王立エルゼマリン学園の夏季期末考査では堂々の学年一位を獲得しましたのよ。おほほほほ。
……さて。そんな私が通う王立エルゼマリン学園は昨日から夏休みに入り、私は港町エルゼマリンから王都に向けて帰省中ですの。

私、毎回の長期休暇には必ず帰省しておりますのよ。大好きなお父様お母様、そしてお兄様と一緒に過ごせる大切な時間ですもの。勿論、学期内もお手紙でやり取りはしていますわ。ついこの間も『今年のワインは中々出来がいい』ですとか、『買った鉱山のおかげで例の商品開発が好調だ』ですとか、『武術大会の優勝おめでとう。これで七連覇だな』ですとか……そうしたお手紙を頂いたばかりですのよ。でもやっぱり、手紙のやり取りだけでは足りませんわね。お会いしてお話ししたいこと、山ほどございますの。
……それから、休暇中は婚約者であるダクター・フィーラ・オーケスタ様とお会いできる貴重な

時間でもありますわね。
ダクター様は私の婚約者。でも、身分違いの婚約ですわ。何といってもダクター様は王族。そして一方、私の家……フォルテシア家は所詮、成金貴族ですのよ。
フォルテシア家が貴族になったのは、私が幼い頃。お父様がお祖父様の事業を引き継いで大当たりして、そのお金で爵位を買いましたの。
生粋の貴族でもない娘が王子と婚約なんて、と顔を顰める貴族も多いですわ。……まあ、誰が口を出すまでも無く、こんなものは愛の無い政略結婚ですわね。ええ、私も重々承知の上ですわ。けれど、ダクター様もこの婚約には乗り気でらっしゃるの。私ではなく私の家の財力が魅力的だと思ったにせよ、王子の方から私を見初めて婚約の申し出をなさったのがこの婚約のきっかけよ。
財政が傾きかけている王家はフォルテシア家の財力が欲しいのでしょうね。そしてフォルテシア家は王家との婚姻によって成金貴族の地位を脱却。これはどちらにとっても旨味のある結婚ですの。
そしてこの婚約は実態がどうであれ、表面上は王子自らが望んだ婚約ですから、周りが何を言おうが盤石！　フォルテシア家の繁栄は間違いないものなのですわ！
……というのは置いておいて。

「屋敷が燃えていますわ」
……帰省したら、屋敷が燃えてましたわ。
ええ。屋敷が、燃えてますのよ！

燃えてますわ。めっちゃ燃えてますわ。屋敷って燃えるんですのねえ……いえ、燃やせば大抵のものは燃えるわけですけれど、それにしても、屋敷が、燃え……まるで現実味がありませんわ。

自分の育った家、家族との団欒の場、数々の思い出と財産の保管場所である屋敷が燃えている、というのは、あまりにも、現実味がありませんのよ。

私の家族は、どうしたのかしら。お父様もお母様も、おそらくお兄様も、屋敷にいらっしゃったはずよ。その屋敷が燃えている、ということは……いえ、私の家族が死ぬはずありませんわ。こんなことで死ぬはずありませんの。家族の無事を信じて……でも、財産は間違いなく致命傷、ですわ。

……そして、まるで現実を呑み込めていない私に追い打ちをかけるように、王家の兵士達が近づいて参りましたの。どう見ても、『ダクター王子の婚約者を助けるため駆けつけた』というようには、見えませんわ。

私が警戒していると……兵士達は、冷たい顔を私に向けて、言いましたのよ。

「ヴァイオリア・ニコ・フォルテシア。貴様には第七王子ダクター・フィーラ・オーケスタ殿下暗殺未遂の容疑が掛かっている。城まで同行してもらう」

はい。ということで、私、そのまま王城まで連れていかれましたわ。そうしてあれよあれよという間に玉座の間へと引き立てられて参りましたの。

玉座の間には人がたくさんいますわね。私の婚約者である第七王子ダクター様と、私の義父となるはずの国王陛下。若くして貴族院の総裁となったクリス・ベイ・クラリノ様。……後は、無能な貴族がたくさんと、私に槍を向けている兵士がたくさん、ですわね。

「ヴァイオリア・ニコ・フォルテシア！　この度はよくも、ダクターを殺そうとしてくれたな！」
そして、国王陛下が早速、声を張り上げましたわ。でも、ここでそれを受け入れるわけには参りませんのよ。兵士の槍にも怯まず、私、弁明しますわ。
「お言葉ながら、陛下。それは誤解でございます。誓ってそのようなことはしておりません」
「とぼけるな！　貴様がダクターに贈った香水瓶！　そこから強い毒が検出されたのだぞ！」
国王陛下は兵士の一人に香水瓶を持ってこさせていますけれど……見覚えのない瓶ですわ。細工を見ても、安物ですわね。こんな安物、この私が婚約者に贈るはずがなくってよ。
「陛下。私がダクター様の今年のお誕生日にお贈りしたものは、白金象嵌の万年筆でしたわ。そのような香水瓶をお贈りしたことはございませんの。ねえ、そうでしょう？　ダクター様」
一応、一応ですけれど、ダクター様にも確認を取りますわ。私、彼の婚約者として、節目節目のお祝いの品を欠かしたことはございませんのよ。愛の無い政略結婚を維持するためでもありますし……愛の無い政略結婚の中でも愛や思いやりを育む余地はあると思いましたもの。ですから、品の選定に手を抜いたこともございませんの。何を何時(いつ)お贈りしたかも覚えていますわ。
……でも。
「い、いや！　今年、贈られたのはこの香水瓶だ！　間違いない！」
……ダクター様は嘘をついて、国王陛下の側に、つきましたのよ。
私、不覚ながらちょっぴり呆然としてしまいましたわ。
ええ、空しいものですわね。私、王子の妻として隣に立つために十分な能力を磨いてきたつもり

ですわ。そして何より、ダクター様とのやり取りに手を抜いたこともありませんでしたの。愛し愛される努力を怠ったことは、ありませんでしたわ。本当に。

……それでも、裏切られるんですのねえ。こんなに、あっさりと。

「そういうことだ、ヴァイオリア・ニコ・フォルテシアよ！　おお、なんと嘆かわしいことだ！　まさか、婚約者を殺そうとするとは！　やはり、フォルテシアのような新興貴族を王子の婚約者にするのは間違っていたか……」

まるで意味の分からないことに、国王陛下は大仰に嘆く様子をお見せになられていますし、貴族達はひそひそと『これだから尊い血の流れていない成金は』だの『やはり新興貴族などに貴族面をさせてはいけないな』だの、好き勝手言っておられますわね。

そしてダクター様は愛しい婚約者である私が濡れ衣を着せられているというのに、まるで反論しませんわ。まごまごしながら適当に相槌を打っているばかりですわ。……まあ、庇ってくれるなんて期待はしていませんけれど。

「静粛に！　……大罪人、ヴァイオリア・ニコ・フォルテシアよ！　王族暗殺未遂の罪で、お前を国外追放とする！」

裁判も無しに私の処分が決まりましたわ。法治国家の名が泣きますわね。ふざけてましてよ。

「陛下、お待ちください」

……と思ったら、声が上がりましたわ。

進み出てきたのは、金髪に碧眼、そして高い身長に引き締まった体躯の男性。……貴族院総裁のクリス・ベイ・クラリノ様ですわね。

クリス様は新興貴族を嫌う貴族院の総裁ですけれど、上流貴族にしては珍しく、能力の高いお方であられますのよ。
「ふむ、クリス・ベイ・クラリノ。どうした」
クリス様の登場に、場がざわめきますわね。私、ちょっぴり期待して、クリス様の発言を待ちますわ。……そして。
「それでは民に示しがつきません。尊い王族を狙ったこの蛮行に相応しいのは、死のみかと」
クリス様は、そう、はっきり言いましたわね！
アーッ！　裏切られましたわ！　見事に期待を裏切られましたわーッ！　減刑嘆願かと思ったら逆ですわ！　こいつ、こいつ……国外追放に飽き足らず、死刑を！　重ねてきましたわーッ！
「成程、確かにそうだな。死刑こそが相応しい！」
「貴い血筋でもない者が貴族を名乗った天罰だ」
「新興貴族はやはり信用できないな！」
……ああ、クリス・ベイ・クラリノのとんでもない進言と、それに賛同して頷く貴族の面々。『ざまあみろ』と言わんばかりの、下卑た好奇の目……すべては仕組まれたことで、筋書き通り、なのでしょうね。
つまり、ここは劇場。私が贈ったことにされている香水瓶も、証拠などではなくて、所詮は舞台の小道具。ここの貴族達は皆、新興貴族であるフォルテシア家を良く思っていない、歴史と血だけが取り柄の貴族達。彼らによって私は、罪人役を演じるように仕向けられた、ということ。
……そう！　私は、陰謀に巻き込まれたのですわ！

この陰謀の目的はただ一つ。『フォルテシア家に冤罪を掛けて取り潰すこと』。
フォルテシアを犠牲にするだけで、フォルテシアが所有していた財産をすべて没収して国庫に入れることができますし、『成り上がりの新興貴族』が気に食わない貴族達のご機嫌取りもできますわね。ホント法治国家の名が泣きますわよ。
……ああ愚かですこと。こんなことをするくらいなら、何故私と王子の婚約を進めたのかしら。
そもそもこの婚約自体、王家の恥でしたわね。『金しかないが金だけはある』フォルテシア家と王家との婚姻。これは事実上の、『名誉をくれてやるから金を寄越せ』という王家からの援助要請でしたもの。
そう。この国、財政が傾きかけていますの。埃を被った血と歴史しか持ち合わせていない無能な貴族達が浪費するだけ浪費して、全く生産しないものですからね！
だからこそ……新興貴族として。新たにこの国を牽引し、より良い方へ導くための力として、フォルテシア家は王家との婚約を受け入れたのですわ。
この腐った国を、それでも良くしようと。王家がフォルテシアの財産に寄生しようとしていることは分かった上で、それを利用して上手くやって、この国をより良く、と。
……それなのに。
「ねえ、ダクター様。あなた、私との婚約を覚えてらっしゃって？」
「ああ、覚えているとも！　だから……僕、ダクター・フィーラ・オーケスタは、大罪人ヴァイオリア・ニコ・フォルテシアとの婚約を破棄する！　異論は無いな！」

そう、ダクター様は仰いましたのよ。
……それを聞いた途端、私の中で何かがプッツンいきましてよ。

「ええ！　異論はございませんわね！」
私を取り押さえようとした兵士の鳩尾（みぞおち）に靴のヒールを叩き込んで、私はその場に立ちましたわ。ごめんあそばせ。もう頭（こうべ）を垂れてやる義理は無くってよ！　そして文句を垂れるのを我慢してやる義理もございませんわ！
「あなたが私の救いの手を振り払うというのであれば、私も異論はございませんわ！　この、自分の脳みそで物事を考えられない木偶（でく）人形！」
私がそう言ってやれば、ダクター様は随分と衝撃を受けたお顔をされてらっしゃいますわねえ！それもそのはず、私、今まで只々ダクター様に尽くす令嬢でしたもの。こんなお行儀の悪いことはしたことがなくってよ！　でも私、お行儀の悪いことができないわけじゃーありませんのよッ！
「す、救いの手？　木偶人形……？」
「ええ、実に滑稽な木偶人形ですわ！　国王もあなたも、ここにいる腐れ貴族の野郎共も！」
会場をぐるりと一周、見回してやりますわ。ここにいる連中の顔を全部覚えてやりましてよ。
「今まで散々見下して馬鹿にしてきた新興貴族に縋り付くしか金策が取れなくて、しかもそれさえも投げ捨てるおつもりなんですもの！　これで上手くやったおつもりかしら？」
腐れ貴族共がどよめいていますわね。ついでに文句も喚き始めましたけれど、ええ、豚みたいに喚いてりゃよくってよ。所詮こいつらは豚ってことですわ。

「貴様、無礼だぞ！　大罪を犯した上、このようにこの国を侮辱するとは！」
唯一、まともに人間の言葉を喋ったのは、クリス・ベイ・クラリノですわ。貴族院総裁ともなれば、人間の言葉が喋れますのねえ。
「お黙りなさいな。……クリス・ベイ・クラリノ。あなたなら、もうちょっとは上手くやる能力があったでしょうに」
けれども、私が心の底からの『がっかり』を込めて睨んでやったら、クリスの青い瞳が動揺に揺れましたわね。
……ええ。正直、ダクター様より、クリスの方がガッカリですのよ。
ダクター様は父王の判断に従うしかありませんけれど、クリスは自分で貴族院を動かせる立場。そして能力も十分にあったでしょうに……賢くない奴は、私、嫌いよ。
「わざわざこんなつまらないやり方を取るなんて。随分とがっかりさせてくださいましたわね。フォルテシアから金を巻き上げるにしても、もうちょっと上手くおやりなさいな」
若く麗しい貴族院総裁殿に苦言を呈してやったなら、もう、私が言うべきことはそう多くありませんわね。
「ねえ、ダクター様」
ですから私、最後にダクター様に向き直りますわ。愛し愛される努力を積み重ねてきた婚約者は、私の視線を受けて、明らかにビビッてやがりますけれど。
……ええ。私、もう後戻りはできなくってよ。でも構わないわ。所詮フォルテシア家は成金貴族。そして私はもう家を無くした没落秒読み令嬢ですものね！

ならば、安い芝居の料金にフォルテシアの財産と私の命を持っていこうとするような銭ゲバ野郎共に遠慮は不要ですわ！　たとえそれが原因でマジモンの没落令嬢になったとしても！

「ねえ、ダクター様。私とダクター様との婚約は所詮、政略結婚。愛なんて無いと、承知の上です。けれどそこに『政略』があったことは確かな事実。……この婚約破棄、高くつきましてよ」

ダクター様はたじろぎますわねえ。大事に囲われて育てられた王子様だもの。こうして真っ向から誰かに敵意をぶつけられることなんて初めてなのでしょうね。自分が敵意を振りまくことはするくせに随分と甘ったれですこと！

「ねえ、ダクター様？　もう一度、仰ってくださいな。『ヴァイオリア・ニコ・フォルテシアとの婚約を破棄することにより、王家は破滅の道を歩むことを選ぶ』と！」

だからちょっと脅かしてやろうと思ってそう言ってみたら、面白いほど怯みますのね。流石は根性無しの金魚の糞と名高い第七王子ですわ。クソ野郎の名に相応しいビビりっぷりでしてよ！

「ダクターよ！　所詮は逆賊の苦し紛れの捨て台詞だ！　動揺するな！」

あまりに威厳の無い息子の姿に何か思ったか、国王が口をはさんできましたわねえ。もう、それすら可笑しくって仕方がありませんけれど。

「な、何度でも言おう！　僕はヴァイオリア・ニコ・フォルテシアとの婚約を破棄する！　僕を殺そうとする賊などと婚姻を結ぶことなんてできない！」

そうしてダクター様は、ビビりながらも国王や貴族達に後押しされて、立派に二度目の婚約破棄を宣言しましたわ。……これが最後のチャンスだったとも、気づかずに。

「そう。……なら、今からあなたと私は赤の他人。遠慮は要りませんわね！　おほほほほ！」
視線が一身に集まるのを感じながら、私は悪の華らしく、と笑い声を響かせますわ。高笑いは令嬢の嗜みでしてよ。
ダクターを、国王を、貴族院総裁を、そして周囲の貴族を、一人一人見つめて……。
「地獄の底で後悔なさい」
にやり、と笑ってみせて差し上げましたわ。

「つ、連れていけ！　この悪魔を……地下牢へ連れていけ！」
私は高笑いを残しながら、兵士に連行されて堂々と地下牢へと進むことにしましたわ。ええ。ハッタリかます時はでかく出ろ。手を離す時は相手の手を切り落とす勢いで。これ、フォルテシア家の家訓でしてよ。おほほほほ。

＊

ということで私、地下牢にぶち込まれましたの。遠慮がありませんわね。これでも私、貴族令嬢なのですけど。
まあ、豚共に人間のマナーを期待する方が間違っていますわね。寛大な心で許して差し……上げませんわ！　許しませんわーッ！　あの野郎共！
まずダクター！　あいつ、よくも婚約破棄しやがりましたわね！　政略結婚とはいえ、私、王子

の婚約者に恥じない令嬢であるようにと努力を重ねて参りましたのよ！　学院では常に成績優良者。武術大会では毎回毎回ぶっちぎりの優勝。王家に嫁ぐ者ならば常に優秀であれと思ってここまでやってきたのですけれど！　ダクター様にはこのお気持ち、通じませんでしたのねえ！　全部無駄でしたわ！　流石にちょっぴり悲しくってよ！

次に国王！　まんまと貴族共に乗せられて、政略結婚相手に決めた家を取り潰すなんて愚か極まりないですわ！　国王が国の頂点ではなく愚の頂点に立つなんてこの国ももうおしまいですわね！　大体、なんですの⁉　金のある家に冤罪吹っ掛けて取り潰しつつ財産を没収するって、法治国家でやっていいことじゃーなくってよッ！

それから……あの貴族共！　特に、貴族院総裁のクリス・ベイ・クラリノ！　あいつらも許しませんわ！　貴族共は浪費と簒奪しかしない！　そして貴族院はそれを良しとして見逃し続けている！　許せませんわ！　許せませんわ！

……私、市場の競争の末に敗れて没落していくのなら、納得できますのよ。けれど、能力と状況の読み合いによる勝負ではなく、権力と数にものを言わせた非合法の暴力で没落させられるなんて、こんな理不尽、許されてはなりませんわね！

ええ。許しませんわ。絶対に、許しませんわよ。でも、私が許さないからといってできることなんて、限られておりますの。

訴え出たところで無意味ですわね。司法はド腐れ王家の肩を持つでしょうし、私を死刑にするために法律を変えるくらいの愚行はやってのけてくれることでしょうし。この世界は不平等ですのよ。

まあ、貴族入りした時から、正しさなんて貴族界に期待していませんけど。
ええ。そう。不平等。能力で成り上がったフォルテシア家が、無能な貴族に潰される。ここはそういう、不平等な世界なのですわ。同じ人間だからといって、私とあの腐れ貴族王族共との間には深ーい溝がございますのね。唯一平等なのは、死ぐらいかしら。
……そう。死。
死は、平等ですわね。私にも、あいつらにも。等しく、死は。死だけは……。
つまり。
「……あいつらも人間だから、殺すと死にますわねえ」

私、気づいちゃいましたわ。あいつら、殺すと死にますわ。
そうですわ。如何に不平等な状況であろうとも。この国に最早正義など無くとも。あいつら殺したら死ぬってことだけは、普遍の真理ってやつでしてよ。私が死刑になるならあいつらだって死んでいいってことですわ。ということは……私、希望が見えて参りましたわ！
ええ、そうですわ！　私、この恨みを晴らせないままこんなところでくたばるわけには参りませんのよ！　家も名誉もお金も全て失いましたもの！　これ以上失うものが無い者は最強ですのよ！
間違ったことをしている奴が笑いながら生き残って、冤罪を掛けられた者が死んでいくというのなら、私だって間違ったことをしてやればいいのですわ。法にも正義にも裏切られたのなら、お綺麗な名分にいつまでもしがみ付いてるのはバカってもんですわね！　ええ！　ですから、私、やりますわ！　やりますわよ！

「あいつら全員、皆殺しですわァーッ！」
殺しますわ！　あいつら全員、殺しますわァアーッ！

二話　シャバに出ますわよ！

さて。あいつらを殺すと決めたら元気になってきましたわ！　やっぱり人間、目標が定まると元気になるものですのねえ。おほほ。さあ、早速、あいつらを殺す計画を立てましょう！

まず……私、この皆殺しを半年で終わらせますわ。

ほら、私、お誕生日が冬なんですのよ。そして私、お誕生日は毎年、家族にお祝いしてもらっていましたわ。今や、家族は生きているかも分からない状況ですけれど……もし生きていらっしゃるなら、ゴタゴタしてるよりは全てが綺麗に片付いていた方が、お父様もお母様もお兄様も、私のところへ戻ってきやすいんじゃないかしら。もし、半年で私が全てを片付けたなら、皆、戻ってきてくださるんじゃ、ないかしら。

……というか、そうでなくとも、お誕生日までこのゴタゴタを引きずるとか真っ平御免でしてよ。許しませんわ。そんなん許しませんわ。神が許しても私が許さなくってよ。

そして何より、冬って焚火の季節ですのよね。

ええ。焚火の季節ですわ。つまり、王城に火をかけたり、憎い王族や貴族連中を火刑に処したりするのにとってもいい季節ってことですわ！

夏場の暑い夜に行う火刑も悪くありませんけれど、折角なら焚火に合う季節に全部燃やしたいですわ！　ということで、私、半年でこの国をひっくり返しますわ！

……ええ。国、ひっくり返しますわ。というか、ひっくり返っちゃいますのよ、この国。だって国王が殺されるんですもの。そりゃーひっくり返りますわ。ひっくり返しますわッ！

国王だけじゃなくて貴族院も潰しますわ。私の死刑を勧めたあいつ。貴族院総裁クリス・ベイ・クラリノ。あいつ絶対殺しますわ。周りにいた貴族共も殺しますわ。だから貴族院は潰れて、そして貴族院を失った国は間違いなくひっくり返りますわ！　ひっくり返った方がよくってよ、こんな国！　ムキーッ！

……まあ、国をひっくり返す、となれば、貴族の集合である貴族院と、民意の集合である大聖堂を一緒にひっくり返すべきかしら。特に、最短でいくならそこ二つは外せませんわねえ。

貴族院はまあ、クリスを筆頭に貴族がいっぱいのド腐れ機関ですわ。王家に対する影響力を持つ機関ですわね。

そして大聖堂は、エルゼマリンに本拠地を置く……まあ、宗教施設なのですけれど。でも、この国では民意の代弁者としての立場が強くってよ。大聖堂は信仰と一緒に民意も集めていますの。庶民の味方、というやつかしら。ですから、大聖堂のトップが発する言葉にはそれなりに重みがありますし、国王も大聖堂を無下に扱うことはできませんのよ。まあ、貴族院と同じくらいには、国に影響を及ぼす機関ですわね。

……ということで、私、目下の目標を貴族院潰しと大聖堂潰しと定めましたわ。それによって王家をひっくり返して王族を皆殺しにしますわ。別に国ごとひっくり返さずとも暗殺で何とかなるかもしれませんけれど、折角やるなら革命ですわ。あいつらが一番やられたくないことをやってやる

のがフォルテシア流というやつでしてよ。おほほほほ。
……さて。やるべきことが決まったら、早速、目標のための第一歩から参りましょうね。まずはこのムショを出ますわ。
ええ。脱獄ですわ。そう！　脱獄ですわーッ！　こんなムショ、とっととオサラバしてシャバに出ますわよーッ！

私が入れられている独房は、石材を組み上げて作られた部屋ですわね。壁も床も天井も石材ですわ。穴ぼこ開けるのは難しそうですわね。
かといって、扉を破るのも難しそうですわね。扉は鉄格子ですから破壊は難しそうですわ。鍵開けしてやりたいところですけれど、針金一本すら無いこの状況だとちょっぴり難しくってよ。大体、鉄格子ってことは廊下から監視し放題なのですわ！　今も私の様子はつぶさに観察されていましてよ！　プライバシーってモンがムショには無いのですわ！
まあ、よくってよ。こういう場所なら、やり方はただ一つですわ。
「……うっ！」
私、『袖に隠しておいた何かを飲んで、急に苦しみ出した』というようなフリをしましたわ。
「なっ……何をした！　おい、ヴァイオリア・ニコ・フォルテシア！」
そうすると当然、私をずっと見張っていた兵士ったら、私が自害したとみて慌て始めますわねえ。私はそのまま床に倒れ込んで、ピクリとも動かなくなりますのよ。……となると困るのはこちらの兵士。特に気を付けて見ておけとでも言われていたんでしょうに、その囚人が自害してしまったと

なれば大目玉待ったなしですものねえ！

「ま、まさか、死んだのか……？」

そして兵士が三人、私の死を確認すべく、牢の中に入ってきて、一人が私を覗き込んできて……。

「死ぬわけありませんわねェーッ！　考えが甘くてよッ！」

当然！　そうなれば私のラリアットの餌食でしてよ！　甘い！　甘すぎますわねえ！　武術大会優勝者の力は伊達じゃありませんのよ！　そのまま驚く二人目にタックルかまして倒したら、逃げようとしていた三人目の顎を狙ってハイキック！　二人目が起き上がる前に絞めて落としますわ！　不意打ちならば抜刀すらしていない雑魚兵士三人くらい落とすのは簡単なことですのよ！　おほほほほほ！

さて、まずは兵士の身ぐるみ剥ぎますわ。兵士の服を着ていれば多少、逃げるのに役立つと思いますの。この兵士にはパンツ一丁でおネンネしていてもらうことになりますけれどごめんあそばせ。

兵士が持っていた鍵束を手に、そのまま牢を出て、鍵をかけておきますわ。兵士三人にはここで閉じ込められていてもらいますわよ。

そうして地下牢の廊下に出たところで……私、気づきましたの。

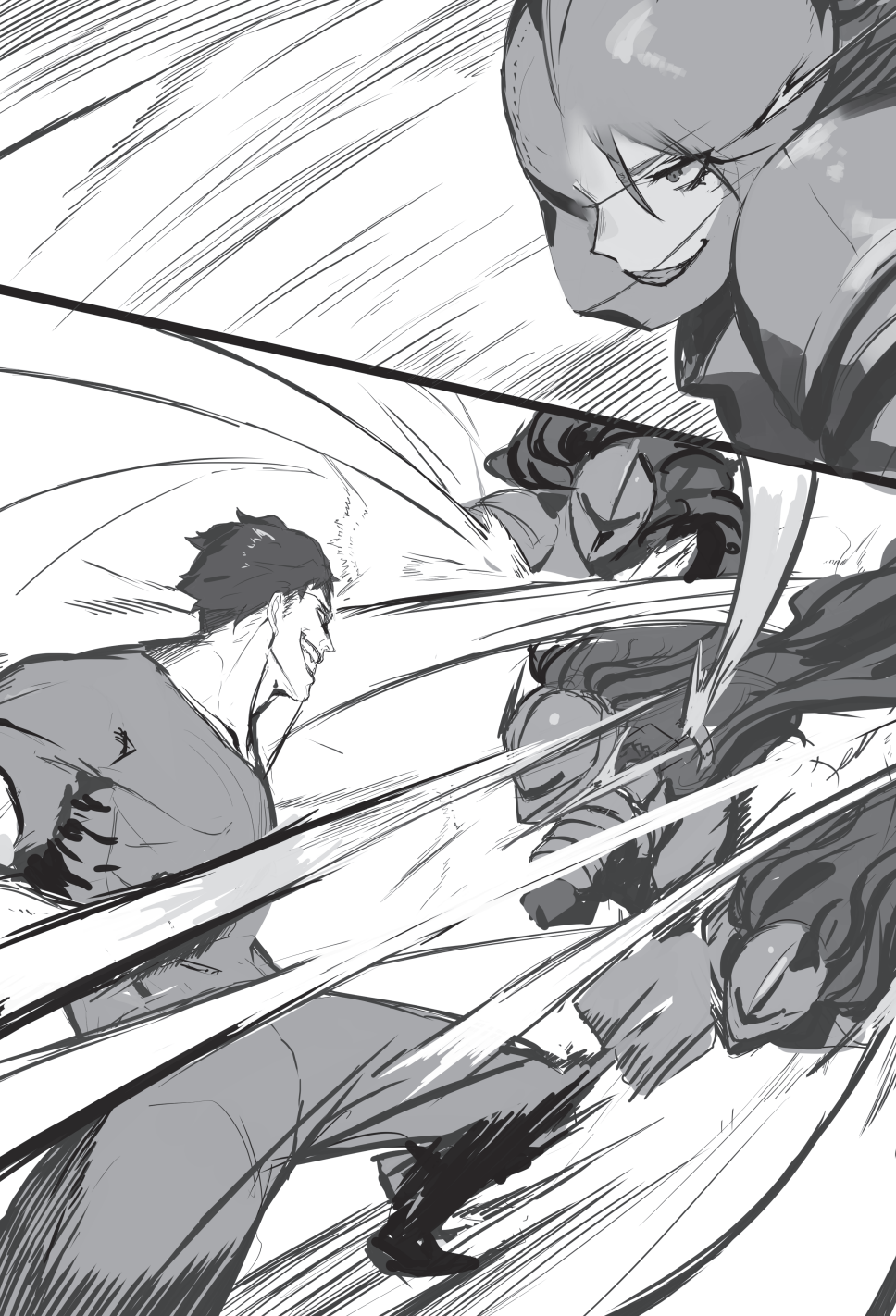
「だ、脱獄か⁉　俺も助けてくれ！」

……こういう風に、私に助けを求めてくる囚人が、結構居ますのよ。……ほーん。

ということで私、片っ端から牢屋を開けて回っておりますわ！

「開けましたわよ！」
「ああ、ありがとう。助かっ……へぶっ」
勿論、ただの人助けじゃあなくってよ！　目的あってのことですわ！　ですから私、開けた牢屋の中に飛び込んでは、中にいる囚人にいきなり飛び蹴りかましてやってますのよ！
意図は単純。『私の飛び蹴りを防げる囚人を探すため』ですわ。こんなムショにぶち込まれているくらいですもの。一人二人くらい、暴力沙汰に慣れた囚人がいてもおかしくありませんわね。或いは、私の飛び蹴りを知力で避けることができるような知能犯もいるかもしれませんわ。
そう！　私は今、そういう『優れた』囚人を探し回っていますの！　この私に相応しい仲間を見つけ出すために！
……私一人でこの国を転覆させてやるのも悪くありませんけれど、効率が悪いったらありゃしませんわ。私、急いでますの。とにかく、急ぎますのよ。冬までにはこの国を滅ぼして王族全員、火刑に処している予定ですもの。……なら、優れた仲間が一人でも居た方が、早くことが進むんじゃないかしら。

……ということでひたすら鍵を開けて扉を開けて飛び蹴り、もしくはタックル、という作業を繰り返し続けて、牢屋の最奥まで来た時でしたわ。
「ごめんあそばせーッ！　……あらっ⁉」
私の飛び蹴りが、あっさりと、防がれましたのよ。それこそ、私がお兄様と組み手の練習をしていた時みたいに、あっさりと。



「随分なご挨拶だな」
……そして黒髪の隙間から、ぎろり、とグレーの目が私を睨んでいましたわ！
「まあ、素敵！」
これには私、満面の笑みですわ！　ニッコニコですわよ！　見つけましたわ！　この私に相応しい仲間を！　ついに！　見つけましたわ！

私の飛び蹴りを受け止めた野郎は、筋肉の塊みたいな奴でしたわ。それなりにタッパありますし、そこにガッチガチの筋肉がガッツリついてるんですのよ。しかもこれ、見せかけの筋肉じゃーありませんわね。実用目的ですわ。こいつ、間違いなく戦うことを生業としているか、あるいは、生業でもないのに戦いまくってるタイプの奴でしてよ！　これは益々期待が持てますわねえ！
素敵な仲間候補を見つけたところで、私、早速もう一発蹴りをお見舞いしますわ。私は無手ですけれど相手も無手。躊躇うことはありませんわね。私、ステゴロでもボチボチ強くってよ。
私が蹴ったら相手はそれを受け止めて、そして私の頭部めがけて拳を振りぬきましたのよ。その速さったら、ギリギリで避けて思わず鳥肌が立つくらいですわ。これは逸材ですわねえ！
「まだやるのか？」
「あら、私ったら嬉しくってつい」
ついでにもう一発延髄に回し蹴りでも、と思ったのですけれど、言われてみれば時間が無いんでしたわ。うっかりですわ。
「一体何が目的だ」

そして相手にはめっちゃ訝しまれてますわ。そりゃそうですわ。牢屋の扉が開いたと思ったらいきなり蹴りつけられたんですものねえ……。でも、そんな状況でも怯えが欠片(かけら)も見えないところ、益々気に入りましたわ。

「ねえ、あなた。私と一緒に来ませんこと？」

ということで早速勧誘ですわ。善は急げというやつですわ。まあ私、間違いなくこれから善よりは悪の道に進むことになると思いますけど！　おほほほほ！　悪だって急いだ方がよくってよ！

「お前と……？」

「ええ。私、この国をぶっ潰すことにいたしましたの。けれど一人では何かと手が回らないでしょう？　ですから、協力者が欲しいと思っておりましたの。いかがかしら？　あなた、これだけの能力があるのにこんなムショにぶち込まれてるんですもの。ワケアリでらっしゃるんじゃなくって？」

用件をサッサと言ってしまえば、黒髪の筋肉野郎はグレーの目を少々眇めて、じっと私を見つめましたわ。

「……牢を開けて回っているところを見る限り、本気らしいな」

「ええ。当然。マジですわよ。私、やると決めたことは絶対にやる性分ですの」

筋肉野郎の目をまっすぐ見上げてそう言ってやれば、筋肉野郎と一秒見つめ合うことになり……そして、一秒後、筋肉野郎はにやりと笑いましたわ。

「ドラン・パルクだ。お前は」

「ヴァイオリア・ニコ・フォルテシアと申しますの。どうぞよろしくね」

「分かった。ひとまず利害が一致しそうだ。手を組もう」
私たちは握手して、交渉成立、ですわ！　やりましたわ！　私、いいかんじの仲間を手に入れましたわ！　……まあ、ムショにぶち込まれてた野郎ですから、絶対にヤバい奴でしょうけど！　まあ実力が伴うなら多少ヤバくてもこの際もう気にしませんわ！　おほほほほほ！

ドラン・パルクと私は二人で早速、地下牢獄を抜け出すことにしましたわ。……とはいっても、難しいことはありませんわね。向かってくる奴が居たら倒して、階段を上がって、上がって、そして王城から脱出すればいいだけですわ。
……まあ、そこまでに王城の兵士がわんさか湧いてきますから、それを払いのけるのが中々に面倒ですけれど。でも、私達以外の囚人もガンガン脱獄してる最中ですもの。兵士の手が回りきらないのが救いですわね。流石の私でも、兵士全員を相手にする自信はありませんわぁ……。
「無手は苦手か」
「ええ、まあ……槍の一本くらいは欲しいところですわねえ。あなたは無手が得意そうですけど」
「そうだな。武器を使うことがあっても、大抵は使い捨てだ」
ドランは早速、私の戦い方を観察しているようですわね。まあ、手を組む相手の戦い方くらいは知っておくべきでしょうし、観察されることに文句はございませんわ。尤も、手の内全部明かす気はサラサラありませんけど。でもそれはドランだって同じことでしょうしね。
「使え。無いよりはマシだろう」
「あら、ありがとう」

ドランが兵士の一人から奪った槍を放って寄越しましたわ。ですのでありがたく、それを使うことにしますわよ。
「一気に抜けますわ！　王城の正門から堂々と出てやりますからついてらっしゃい！」
「分かった」
私が武器を手にして数撃分。何人か兵士をその辺に転がしてやれば、残った兵士も、明らかに怯みましたわねえ。私の実力はもう分かった、ということですわ。怯むのは当然ね。こういう風に怯んでくれるからこそ、腕の見せ甲斐があるってモンですのよ。
そして怯んでる相手を撒くのはそう難しいことじゃありませんの。露払いをドランに任せつつ勢いで突っ込んでいって、とにかく道を拓くのですわ。後から続いてくる囚人集団が兵士の足止めをしてくれますから、私はとにかく先へ進むことを意識して……そうしてついに、私、王城から脱出したのですわー！

王城からわらわらと囚人達が出てきますわ。どうやら、私が開けた牢から出てきた連中が私達に続いて脱獄してきたみたいですわね。まあ、よくってよ。後は野となれ山となれ、ですわ。私の知ったこっちゃーありませんわ！
さて、人の心配より自分の心配ですわね。勿論、王城から出たってまだまだ追手は来ましてよ。ひとまず王都の外に出ないことにはどうしようもありませんわね。
ということでまずは、馬を盗みましたわ。正面玄関に馬車なんか停めてる方が悪くってよ。
「あなたたちだってボンクラ貴族共に使われるより私を乗せる栄誉に与る方がいいでしょう？」

お馬さん達はいい子ですわぁ。よく躾けられて、賢そうですもの。脱出の足にするには丁度いいんじゃなくって？　ま、最悪馬刺しにして食べてもいいわけですし、遠慮なく頂いていきますわね！

「あなた、乗馬はできまして？」

「ああ。俺を乗せると重いらしいがな」

……あっ、ドランを乗せたお馬さんが『重いんだけど』みたいな顔してますわ。まあ辛抱して走ってくださいまし！　ここでとっ捕まったら私達に馬刺しにされる前に馬刺し待ったナシですわよ！

「じゃあ飛ばして参りますわよ！　……それでは皆様、ごきげんよう！　おほほほほ！」

ということで、私達は王城前の兵士達にご挨拶して、さっさとオサラバしますわー！

＊

ガンガン警鐘の鳴る王都を馬で駆け抜けますわ。馬は足の速い良い馬でしたし、王都の門を守っていた見張りは馬上から私が投げた槍でアッサリでしたし、そのまま門を突っ切って王都を出ていくことに成功したのですわ！

そのまま王都を出たら、ひとまず南西に向けて走っていきますわ。王都の南西の方は野盗だの山賊だのが出て非常に治安が悪いんですの。シャバに出て一発目に向かう方面としては悪くなくってよ。

「エルゼマリンの方へ向かうのか」
そして、馬を走らせる途中、ドランがそう、聞いてきましたわ。……そうですわねえ。王都を出て南西に向かっていくと、海に行き当たりますわ。そして、そこにこの国最大の港町であるエルゼマリンがありますのよ。
エルゼマリンといえば、私の第二の故郷ですわね。屋敷は王都ですけれど、私が在籍する王立学園はエルゼマリンにありますの。寮生活してる私は当然、エルゼマリンに住んでいるようなものなのですわ。
エルゼマリンは、王立学園や大聖堂を有する風光明媚な港町。海と空の青に街並みや大聖堂の白がよく映えて、それはそれは美しい景観ですの。私、あの景色がとっても好きなのですわ。
……そして景色だけがエルゼマリンの良いところじゃあなくってよ。エルゼマリンは……裏通りを、有していますの。
「ああ、エルゼマリンに行くのも悪くありませんわね。私、王立学園に在学しておりますの。エルゼマリンのことはよく知っていますわ」
「知っている、か。どの程度知っている？」
ドランは私がエルゼマリンの表の顔しか知らないんじゃないかと危惧していたようですけれど、甘くってよ。私、エルゼマリンのことは表も裏も知り尽くしておりますの。
「あそこは悪党の溜まり場ですし、カツアゲする貴族にも困りませんわね。そういう認識ですわ」
エルゼマリンの裏通りは、私もよく知る場所ですわ。ええ。あそこ、カツアゲに困らないんですのよ。特にこちらが麗しの貴族令嬢と見えると、あいつらゴロゴロ寄ってきますもの。返り討ちに

して『ちょっとそこで跳ねてごらんなさいな』とやれば連中のお財布を頂けますのよねえ……。お小遣い稼ぎには丁度よくってよ。
「……お前、貴族の令嬢ではなかったか？」
「貴族令嬢がカツアゲしてはいけない理由がございますの？」
ドランはなんだか微妙な顔をしてますけれど、私、胸を張って答えますわよ。ふふん。
「……なら、裏通りも分かるか？　エルゼマリンの裏通りに『ダスティローズ』という店がある」
「ああ、存じておりますわ。私、あそこの常連ですの」
『ダスティローズ』なら知っていますわ。エルゼマリンから王都へ帰ってくる前に魔物素材を売ったお店ですわね。……またドランが微妙な顔してますわ！　失礼ですわね！
「お前、本当に貴族の令嬢か……？」
「貴族の令嬢が闇市で取引していたら、何か問題でもありましてェー？」
そう。エルゼマリンの『ダスティローズ』といえば、そっちの方面でちょいと有名な買取屋ですわ。私、休日の度に学園を抜け出して、エルゼマリン近郊の森で魔物を狩ってはその毛皮や牙を獲って、それを売ってお小遣いを稼いでおりましたの。表の市場で売るより裏の市場に流した方がよっぽどお金になりますのよねえ……。それに、捕まえて羽むしった妖精だの、学園に通う貴族の子女の醜聞だの弱味だのを買ってくれるのは裏市場だけですもの。おほほほほ。
……まあ、そういう風にお世話になっているお店ですから、多少は知っていてよ。多分あの店、店主が中々に切れ者なんですのよ。そうじゃなきゃ、あの界隈で商売なんてやってられないはずですわ。だからあそこの店主なら、多少、信用が置けるかしら。勿論、顔は見たことありませんけれ

ど。おほほ。
……そりゃそうですわ。表でできない取引をする店なら、当然、お互いの顔が見えないようにして取引しますものねえ。ですから『ダスティローズ』の店主については、ただ、手が大きくて骨ばっていて肉が少なくて……その、骸骨みたいな手、という印象しか、ありませんわぁ……。あの手、不気味なもんだから印象に残ってますのよ……。
「あそこの店主のジョヴァンは俺の仲間だ。これから何をするにも基盤は必要だろう。異論がなければそこへ向かうが」
「なるほどね。まあ、よくってよ」
「もし俺に何かあっても、ドランの紹介だと言ってくれれば中に通されるはずだ」
ジョヴァン、ジョヴァンね。覚えましたわ。あそこの骸骨店主、そういうお名前でしたの。……当然知りませんでしたわ！　知らないに限りますもの！　裏社会の情報って、そういうモンでしてよ！　知っちゃった以上、私はこれから裏社会入りですわねーッ！
「ついでにもう一人……まあ、戦える奴が居る。役に立たないこともないだろう」
なんですのその歯切れの悪さは。私、無能とつるむ趣味は無くってよ！
でもまあ、ムショ入りしてた奴のお仲間なんて、どうせそいつもヤバい奴なのは間違いありませんものねえ……生活の基盤が手に入るならこれ以上の文句は言いませんわ。ええ……。
「当面の予定はそれでいきましょう。エルゼマリンの『ダスティローズ』へ向かう。それでよろしくて？」

「ああ。それでいこう」
ま、これで予定は決まりましたわね。ムショを出てきちゃった私達は当然、お尋ね者ですわ。当面、姿を隠しておける場所が欲しいですし、その点、エルゼマリンにドランの知り合い、かつ私が知らないわけじゃない相手が居て、そこに転がり込める、っていうのは非常に幸運ですわねえ。
「さて。そうと決まれば、早速、エルゼマリンへ向かう準備をしなくてはね」
「準備？」
「ええ。あなた、囚人服を着たままエルゼマリンに入る気ですの？」
当然、エルゼマリンでも検問がありますわ。というか、港町という都合上、下手したら王都よりキッチリした検問ですわ。つまり、そこに返り血まみれの兵士の鎧着た私と、返り血まみれの囚人服野郎が連れ立っていったら……間違いなく二回目のムショ入りとなるのですわッ！
「……そう言われてみればそうだな」
ドランも自分の恰好を見て、げんなりした顔してますわ。私もげんなりしたいですわ！
「王都からエルゼマリンまで、警戒しながらでも馬を飛ばせば二日で十分ですわね。食べ物は道中で狩ればよくってよ。ああ、でもそうなるとあなたはともかく、私は武器の一つくらいは持っておきたいところですわね。それに加えて、服と、あと、多少の先立つものが欲しくってよ」
ドランの口ぶりだと、エルゼマリンに到着しさえすれば多少のお金や装備は融通してもらえそうですけれど、私、他人に借りは作りたくない主義ですの。ましてやどう考えてもヤバい奴らに借りなんて作らないに限りますわ！
「まあ、幸い、この街道は貴族がよく通りますもの。……適当に追い剥ぎしましょうね」

そう。服も武器もお金も、奪えばよくってよ。おほほほほ。

＊

「有り金と装備、そして服も全て置いていって頂きますわ！」

ということで早速、追い剥ぎしてますわ。丁度いい具合に通りかかった貴族の馬車の前に飛び出していって、馬が驚いて止まったところで御者台に飛び蹴りかまして御者を叩き落としますわ。その間にドランが馬車の中に突入して、中にいた護衛らしい奴をぶん殴って粉砕。こうなれば後は、戦えもしない貴族だけが残ることになりますの。簡単なお仕事ですわね。おほほほほ。

「きゃあー！　助けてぇー！」

ドランが踏み入った馬車の中から、ご令嬢のものらしき悲鳴が聞こえてきますわね。順調なようでしてよ。さて、私も嬉々として馬車の中に突入しますわ！

「さあさあさあ！　命が惜しかったら有り金と装備と服を置いていきなさい！」

けれども、私も馬車の中に突入したところで、その中にいたご令嬢が目を見開きましたし、私もちょっと、既視感を覚えましたわ。

「……あら？　あなたどこかで見た顔ね」

「あ、あなたは……！」

……ええ。そう。どっかで見たことあるツラではありますのよ。この、今一つ品のない顔つきといい、いかにも学の無さそうな振る舞いといい、甘ったれた喋り方も、どことなく、聞き覚えがあ

りますのよねえ……。
「フォルテシアのご令嬢じゃないですかぁ！　覚えてないんですかぁ⁉」
……ええ。相手は私のことが分かるようですわね。そして私も、このご令嬢に見覚えはありますのよ。記憶には引っかかってますの！　でも思い出せませんわねえ！　私が記憶を手繰りつつ悩んでいると……。
「ほら、入学した時からずっと、学園で同じクラスじゃないですかぁ！」
「あっ、思い出しましたわ。学園の入学式の後、『フォルテシアは所詮、成金の汚らわしい一族ですよねぇ！　身の程をわきまえてくださぁい！』とか言いながら私の鞄に水ぶちまけてくださったご令嬢ですわね！」
ヒントをもらったこともあって、思い出せましたわ！　思い出せてスッキリでしてよ！
まあ、多分このご令嬢はそこまで思い出してほしくなかったと思いますけれど。でもしっかり思い出しましたわ。
ええ。そうですの。こいつ、いけ好かないアマですわ。フォルテシアの名を侮辱した上に私の教科書全部駄目にしてくれやがった奴でしたわ！
「なら手加減する必要はございませんわね！　身ぐるみ剥ぎますわ！」
「そ、そんなぁ！　私達、同級生じゃないですかぁ！」
「ゴタゴタうるさくってよ。鼻の骨叩き折られたくなかったら、大人しく身ぐるみ剥がされなさいな」
この世は弱肉強食かつ因果応報ですのよ。教科書に水ぶっかけた奴は身ぐるみ剥がされたって文

句言えませんわねえ！　それでも文句を言いたいなら私に追い剥ぎされない強さを身につけてからになさいな！　おほほほほほ！

ということで身ぐるみ剥ぎましたわ。私、知っている相手だからって遠慮はしませんわよ。する意味がありませんわ。馬車の外にご令嬢を叩き出して差し上げたら、さめざめと泣いてますわ。気にせず私は馬車の中でお着替えしましたわ。……ご令嬢の持ち合わせのドレスを着たのですけれど、ちょいとバストがきつくてよ！　でもウエストは緩いですわね！　まあしょうがなくってよ！

「終わったか」

「ええ。これでエルゼマリンに入れる恰好になりましたわね」

ドランはドランで、適当に護衛の服を剥いで着替えたらしいですわ。これで私達、貴族令嬢とその護衛、といった風貌になったかしらね。

「武器は……あら素敵！　弓がありますわねえ！」

そして最高なことに、ドランが殴り倒した護衛の得物は弓だったようなんですの！　嬉しいですわ！　嬉しいですわ！　私、武器の中では弓が二番目に好きなんですの！

「だが、食料が無いな。……そうか、貴族連中は野営などしないんだな」

まあ、そうですのよねえ……。食料は元々、期待してなくってよ。貴族連中は旅中でも高級宿に泊まる生活を送りますもの。食事を持ち運ぶような真似はしませんのよね。

まあ問題なくってよ。私、そこらの貴族連中とは違いますの。ディナーが出てくるまで呆けて待ってるような真似はいたしませんわ。

「当初の予定通り、適当に狩りで今夜のディナーを用意することにしましょう」
私、自分のディナーは自分で狩りに行きますのよ。だって狩りは貴族の嗜みですもの。おほほほ。